平成１６年　５月　８日
市川市立妙典中学校

この旗の下、力を合わせよう

僕たちの妙典中に待望の校旗が完成しました。妙典中のシンボルにふさわしいすばらしい旗です。校歌の歌詞の二番に「世界の息吹、うけとめて」というところがあります。僕たちはこの校旗がなびいているのと同様、世界の息吹をうけとめたいと思います。向かって来る風が、ここち良いものであれば受け止め、台風のような悪影響を及ぼすものであれば、なびくままではなくて、風に抵抗して、はねかえしていきたい。今の心境を詩で表現してみます。

我ら一同、旗のもとに集いて
波を越えていこう。
喜びも悲しみもわかち合いて
波を越えていこう。
今、人生の大海渡るため、
今、大きな船に乗りこみ
はるか水平線のかなたへ・・・・

この校旗を妙典中という船のマストにし
世界の大波越えて行こう。
そう心に誓います。本当にこんな素晴らし
い校旗をありがとうございます。

妙典中待望の開校

校章も決まり二日に開校式

校章の「稲穂」、"中"の字を稲穂がやさしく包んでいる

校章をデザインされた弘田稔氏

初代校長に就任された石原孝一氏

行徳では５校目の中学

行徳地区では五番目の中学校として開校が待たれていた市立妙典中学校が開校、その「開校記念式典」が四月二日同校音楽室で行われました。

同中学校は、第七中の過大化を緩和し学校教育の充実を図るために設立されたもの。しかしながら、今回の開校は仮校舎で、六十三年三月を目途に妙典地区に本校舎を建設する予定となっています。

仮校舎は、校地八千三百五十九・七六平方㍍に建つ、四千五百六十・三平方㍍のプレハブ二階建て。教室は普通教室十六、特別教室九、管理諸室十四。また、近隣五百六十七平方㍍の体育館も設置されています。

妙典中の校章は「稲穂（ただきいね）」。デザインを担当されたのは市立行徳図書館長の弘田稔さん。中央に"中"の字を記し、生徒が仲良く力を合わせてのびのびと心豊かに成長することを願って制作されたものです。

開校記念式典となった音楽室には、学校関係者、地域代表者など約百人が列席、席上あいさつに立った初代校長の石原孝一氏は「新設校の教師に任命されて全職員はりきっています。十九名が一丸となってすばらしい学校になるよう努力します」と述べ、その意欲が披露されました。

高橋市長より公印伝達が授与された

まもなく、５月１０日の開校記念日がやってきます。妙典中学校は今から約１９年前の昭和６１年４月に、生徒数２６１名の６学級でスタートしました。現在の場所ではなく、入船の地でしかもプレハブからのスタートでした。

上記の作文は当時の生徒会長が、校旗のお披露目式に校旗に寄せる思いを綴った作文です。当時の生徒さんの思いがひしひしと伝わってきます。

妙典中学校の教育目標は３つあります

①ふれあいを大切にする生徒

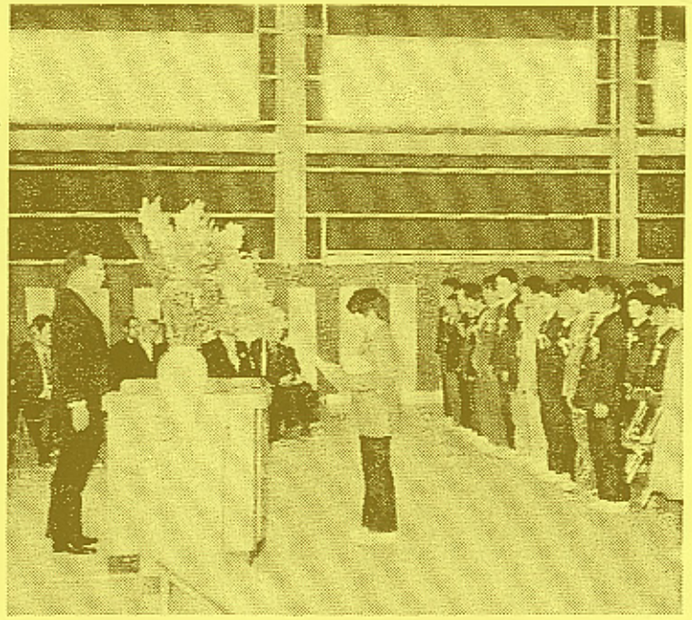
②進んで学ぶ生徒

③頑張り抜く生徒

その中でも、特に教師と生徒との心のふれあいを大切に、子どもたちが持っている自然の明るさを大切にしていこうという考え方で教育を進めてきました。

新設・妙典中の入学式

一期生のみ261人でスタート



妙典中の入学式は、最後に新入生代表の山口信夫君（中央）が中学生になった喜びを元気よく表明した。左は石原孝一校長

諸君の前に道はない

校長が激励　優れた手本となれ

開校記念講演会のお知らせ

来る５月１０日（月）の開校記念日に、初代校長の石原孝一先生をお呼びして、記念講演会を開催致します。午前１０時５５分から１１時５５分までの１時間の講演ですが、当時の貴重な苦労話や学校を作りあげていった当時の生徒さんの様子を話して下さるそうです。ちなみに「妙典中」の妙の字は優れていることを表し、また典の字は手本になるという意味です。だから、妙典とは、優れて人の見本になる人々が住んでいるところという意味だそうです。左や上記の地域新聞の記事から、当時の学校の様子を伺うことができます

校長先生から、当日はいろいろな話が聞けると思いますが、校章は市立行徳図書館長の弘田稔さんがデザインによるもので、良く見ると稲穂が軽く頭を下げて、向かいあっています。これは、妙典の地がかって水田が多く、自然の恵みが豊かだったことを象徴し、実りを表現しています。このことは、皆さんに充実した中学校生活を送ってほしいという切実な願いがこめられています。また、稲の穂が下の方で結ばれているのは、お互いが仲良くすることを願い、稲穂が垂れているのは、こうべを垂れる、つまり謙虚さもうたっています。・・・・・・・・・・・・・・　記念講演をお楽しみに・・・・・・・・・・・・・・